

Title	Death and the Warrior/Warrior Spirit in August Wilson's Century Cycle
Author(s)	中山, 大輝
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/88120">https://hdl.handle.net/11094/88120</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏名 ( 中山 大輝 )

論文題名

**Death and the Warrior/Warrior Spirit in August Wilson's *Century Cycle***  
 ( オーガスト・ウィルソンの20世紀サイクルにおける、死と戦士/戦士の魂 )

## 論文内容の要旨

本論文は、アフリカ系アメリカ人劇作家August Wilson (オーガスト・ウィルソン) の作品に描かれる戦士/戦士の魂と死の表象に着目し、生死に対する彼のメッセージを明らかにすることを目的としたものである。1960年代のブラック・パワー・ムーブメント (The Black Power Movement) や母親の影響に触発されたウィルソンは、20世紀の黒人民衆史を、10年毎に1作、全10作で描くピッツバーグ・サイクル (The Pittsburgh Cycle) を完成させた。サイクル劇を通じてウィルソンは、アフリカ系アメリカ人に、自らが迎ってきた歴史や人種的アイデンティティ・コミュニティの重要性を幾度となく発信してきた。以上の経緯を念頭に置くと、ウィルソンのサイクル劇研究において、「戦士/戦士の魂」は必ず指摘されるテーマであった。「戦士の魂」とは、白人中心の社会から受ける圧制に抵抗するアフリカ系アメリカ人男性の精神であり、この重要性は先行研究で十分に指摘されている。しかし一方で、この魂が、登場人物同士の殺人など、黒人の死と関連している点にも留意すべきである。また、ウィルソンは執筆を進めていく中でサイクル劇構想を思いつくが、彼のサイクル全作品に死が描写されている点にも留意すべきである。このことは、歴史やアイデンティティ、コミュニティの問題に加えて、ウィルソンが、作品を執筆する当初から、死の問題を意識していたということを意味する。ウィルソンにとって死の問題は、人種や歴史などの問題と同様に重要な問題であると考えられる。

第1章は、ウィルソンのサイクル第2作、*Ma Rainey's Black Bottom*に登場するトランペット奏者Leveeの戦士の魂を考察する。母が白人にレイプされ、父が焼殺されるというLeveeの過去は、彼に戦士の魂を覚醒させる契機であると考えられるが、エンディングで彼は、同じバンド仲間のToledoを衝動的に刺殺してしまう。この殺人は、Leveeが覚醒させた戦士の魂が、同胞の黒人に向けられたことを舞台上に描くものと解釈できる。本作ではブルースが、白人の商業主義及び黒人の歴史を表象するが、Leveeはブルースが照射するような歴史・伝統の重要性を否定し、白人の物質主義的な価値観を信奉する。これは、彼がW.E.B. Du Boisが言う二重意識の虜になってしまったことを意味する。以上を踏まえ、第1章では、ブルースの表象、死、Leveeの戦士の魂に着目して*Ma Rainey's Black Bottom*を読み、アフリカ系アメリカ人が生きてきた歴史・伝統の喪失とLeveeによるToledo刺殺との因果関係を指摘するとともに、この作品が、戦士の魂の誤った覚醒の例を示そうとした作品であると解釈できることを示した。

第2章では、ウィルソンのサイクル第3作、*Fences*に登場する、Maxson家の家父長Troyの戦士の魂が引き起こす問題と、エンディングにおける彼の死の意味を考察した。ごみ収集員という立場を甘受せず、黒人初の運転手の地位を獲得するTroyの様子は、彼こそが、戦士の魂を顕現させる存在であると考えられる。しかし同時に、Maxson家への扶養義務に執着するあまり、彼は自身の家族を蔑ろにしてしまう。重要なことは、登場人物の思考・感情が、本作のタイトルにもなっているフェンスを通じて効果的に描写されているという点である。Troyが息子Coryを勧当する時、彼は息子の荷物をフェンスの外側に投げる。これは、Troyにとってフェンスが、家の内外を区別する境界線を示すと同時に、家族の構成員も恣意的にコントロールできるという、排他的な境界線として機能することを示す。一方、Troyの葬儀直前の様子を描いたエンディングでは、Maxson家が、離散した家族が再会を喜ぶ場所として描かれており、フェンスが家族の再会を迎え入れる開かれた場所として機能していると解釈できる。以上を踏まえ、第2章では、Troyの戦士の魂とMaxson家との確執及びフェンスの表象に着目して*Fences*を読み、ウィルソンが、本作を通じて、戦士の魂が照射する問題点を描きつつも、苦悩に満ちた人生を生き抜いた戦士Troyを葬送しようとした、という結論に達した。

第3章では、ウィルソンのサイクル第4作、*Joe Turner's Come and Gone*で描かれる死の描写、とりわけ「骨の人々」が登場人物Loomisに与えた影響を考察した。かつて宣教師として活動していたLoomisだが、Joe Turnerのもとで労働を強制させられ、周囲との連帯意識が断たれてしまう。これは、Loomisが、Orlando Pattersonが指摘する、「社会的死」

(Social Death) の状態にいることを意味する。注目すべきは、そのようなLoomisに連帯意識をもたらす、死の描写である。呪術師Bynumたちが演奏するアフリカの伝統音楽Jubaの音楽を聞いたLoomisは、突如、「骨の人々」の幻想を見る。この「骨の人々」が、中間航路で命を落とした過去の奴隷たちであることは言うまでもない。「骨の人々」の幻視は、アフリカ系アメリカ人が歩んできた過去、その歴史をLoomisに意識づけることを示唆する。また、Jubaが現存しているという事実は、アメリカという異国の地でアフリカの伝統音楽を保持し続けようとした黒人奴隷たちの苦闘をも暗示する。ウィルソンは、これまでの作品で、死の描写を通じてアフリカ系アメリカ人の暴力の問題性を指摘してきた。しかし、本作では、アフリカ系アメリカ人の歴史を想起させ、登場人物にアフリカ系アメリカ人としての人種意識を覚醒させる手段として、死が用いられていると考えられる。以上を踏まえ、第3章は、Jubaをはじめとしたアフリカの伝統音楽、「骨の人々」の幻視がLoomisに与える影響に着目して*Joe Turner's Come and Gone*を読み、ウィルソン作品における「責任」(responsibility)が、歴史を回復する義務を意味するとともに、死の意味が、暴力への批判から歴史の発見のためのツールへと変容したという点を指摘した。

第4章では、ウィルソンのサイクル第6作、1960年代のヒル地区を舞台に据えた*Two Trains Running*を扱い、作品内で描かれる対抗文化運動の功罪を、死の表象を通じて考察した。作中におけるMalcolm Xなどの著名なアフリカ系アメリカ人の死は、アフリカ系アメリカ人同士の暴力が悪化している様子を如実に描き出すと同時に、彼ら著名人が主張するイデオロギーに暴力の問題があることを示唆する。「ハムをくれ」と語るだけの登場人物Hamboneは、その行動ゆえにレストランのオーナーMemphisから疎まれており、このことから、黒人共同体内部でも黒人同士の反目や周縁化があることを示唆する。重要なことは、血の表象が、暴力・殺人への警告から仲間同士の結束へとその意味が変容する点である。上述の通り、本作における血は、黒人暴力などを連想させる。しかし、エンディングで、Hamboneの死が共同体に知らされると、元受刑者Sterlingは、Hamboneの遺志であるハムを強奪し、Memphisは、Hamboneに献花する。これらは、Hamboneの死が黒人共同体内部の反目を解消させると同時に、仲間の遺志を継承し、仲間の為に流血するという連帯意識をも、共同体にもたらしたことを意味する。以上を踏まえ、第4章では、*Two Trains Running*における死の表象に着目し、周縁化されたアフリカ系アメリカ人こそ、黒人共同体の結末に必要な点を論じるとともに、そのようなアフリカ系アメリカ人を周縁化させまいとするウィルソンの執筆意図を指摘した。

第5章では、ウィルソンの後期作品における、Aunt Esterと彼女の死の表象に着目した。具体的な作品は、*Two Trains Running*、*King Hedley II*、*Gem of the Ocean*、*Radio Golf*を扱っている。Aunt Esterがサイクル劇において最重要人物である点は、多くの先行研究で明らかにされているだけでなく、ウィルソン自身も認めている。にもかかわらず、彼女が舞台上に現れるのはサイクル第9作*Gem of the Ocean*のみであり、他の3作品では名前が言及されるだけである。このような取り扱いを踏まえると、彼女が最重要人物として相応しい描写をされているとは考えにくい。本章では、そのような重要人物をなぜウィルソンが作中で殺したのか、その意味を探求するとともに、彼女の死後の行方を再検証し、彼女の死の必然性を考察した。

Aunt Esterという名が代々継承されていることは、Ester Tylerという名が、名もなきアフリカ系アメリカ人の生きてきた歴史を表象することを意味するが、*Two Trains Running*において彼女の神秘的な年齢を懐疑的に思う者が現れる。この猜疑心は、20世紀後半において、アフリカ系アメリカ人の苦難に満ちた歴史への無知・無関心を示す者が増加していることを意味する。事実、1980年代を舞台に据えた*King Hedley II*において彼女が悲しみで亡くなったことが知らされる。彼女の死は、そのような無知・無関心に対するウィルソンの警告であると解釈できる。重要なことは、このような状況下で、1990年代のヒル地区を描いたサイクル最終作*Radio Golf*において、Aunt Esterの遺志が彼女の家から見出されるという点である。彼女の家の内装が示す精巧さやブラジル産の木材を使用しているという事実は、Aunt Esterの家が、アフリカ系アメリカ人の経験や彼らが生きてきた歴史を代弁していると同時に、彼女の死後も、形象を変えて彼らの歴史が継承されているということを示唆する。また、本作では彼女の家を取り壊しをめぐってプロットが展開されるが、この作品が繰り返し舞台化されることで、Aunt Esterの家、そしてその家が照射するアフリカ系アメリカ人たちの経験の積み重ねが繰り返し提示される。これは、歴史の語り手／継承の担い手がAunt Esterからウィルソン、そして観客へと継承されることを意味する。以上の議論を経て、第5章は、死してなお、Aunt Esterの遺志や先祖の経験・歴史が次代へと継承されていくことを提示するためにも、彼女の死が必然であった、という結論に達した。

結論では、これまでの議論を振り返り、サイクル劇を通して見られるウィルソンの死に対するメッセージを考察した。2021年6月、バイデン大統領は、奴隷解放を祝日とする法案に署名し、「過去を振り返り、人種平等の為に向かっていく必要がある」との声明を発表した。この発言は、サイクル劇を通じて見られるウィルソンの死生観とも共振すると思われる。奴隷制の時代から、多くのアフリカ系アメリカ人が、人種差別に起因する暴力によって命を落としてきた。しかし、黒人の死は、決して過去のものではなく、白人警官による射殺事件など、現代のアメリカ社会においても問題となっている。これは、これまでの死を振り返り、その死から読み取れる、人種差別による圧制の歴史を反

省する必要性を照射する。一方、Aunt Esterは、「人生とはミステリーであり、冒険である」とも語る。これは、過去の歴史ばかりに重きを置くのではなく、未来に向かって進む重要性をも強調するウィルソンの姿勢だと考えられる。未来に進んでいく後世の為にも、過去の死が必要である。以上から、そのような死の役割こそ、本論が提示するウィルソンの死生観である、との結論に達した。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 中 山 大 輝 )			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	准教授	岡本 太助
	副 査	教授	渡邊 克昭
	副 査	教授	畑田 美緒
	副 査	教授	中村 未樹
	副 査	名誉教授	貴志 雅之
<p><b>論文審査の結果の要旨</b></p> <p>本論文 “Death and the Warrior/Warrior Spirit in August Wilson's <i>Century Cycle</i>” は、オーガスト・ウィルソンのサイクル劇における「戦士」あるいは「戦士の魂」という重要な概念を、サイクル劇全体を貫く「死」の描写あるいはその表象性の検証を通して再検討するものである。ウィルソンのサイクル劇とは、20世紀を10年ごとに区切り、それぞれの年代を舞台にする劇を一つ創作し、計10作で20世紀のアフリカ系アメリカ人の経験の全体像を描き出す試みである。そしてこのサイクル劇において、人種差別や抑圧に対抗するうえでアフリカ系アメリカ人にとっての精神的支柱となるものが「戦士の魂」であるが、本論文では、「戦士の魂」がさらに登場人物の間の、あるいは彼らが属するコミュニティ内部の対立や軋轢を生むものであるという点を問題として取り上げ、ウィルソンはそのサイクル劇によって、現代のアフリカ系アメリカ人に対し、その「戦士の魂」を批判的に再考するよう促していると論じている。人種的記憶の精神的継承を表す「戦士の魂」は、当然ながら奴隷制やそれ以前にまで遡る無数の人々の「死」をも内包するものであり、サイクル劇が描く歴史は死というテーマと不可分である。しかしながら、先行研究ではウィルソン劇における死の重要性が十分に論じられているとは言い難く、本論文はウィルソンの死生観を深く掘り下げ、未来における人種平等の実現に向かって努力を続けるためにこそ、先祖の死によって紡がれてきた歴史をよりよく理解することが必要であり、ウィルソン劇がアフリカ系アメリカ人の死を執拗に描き続けることの意味もそこにあるとの仮説を例証することを試みている。シンプルでありながら多面的である「死」をテーマに据え、それがウィルソンのサイクル劇において担う役割を肯定的に捉えるという点に、本論文の独創性があり、各論において個別の作品に特有のトピックをうまく抽出しながら</p>			

ら、「戦士の魂」と「死」が孕む問題とその可能性を多角的かつ体系的に論じてある点で、ウィルソン研究の現在地を俯瞰できる資料ともなっており、その意味でも研究的価値が高い論文であると言える。

第1章では、サイクル第2作『マ・レイニーのブラックボトム』（1984）における音楽と死の描写に着目し、白人による迫害を受けた経験を持ちながらも白人主導の資本主義経済に迎合してしまう登場人物による同胞殺しを、「戦士の魂」の誤った覚醒と捉え、それによって引き起こされる黒人男性による暴力を、ウィルソンがキャリアの初期から既に問題視していたこと、さらにそうした問題を認識したうえで同朋意識を持つことの重要性を訴えていたことを指摘している。特に読み書きのできる仲間の殺害が、「戦士の魂」によって継承されるべき人種的記憶と歴史の喪失を象徴しているという着想は興味深い。

第2章は、サイクル劇第3作『フェンス』（1985）において、家父長トロイが彼の成功を阻む白人社会のルールに抗うために発動させた「戦士の魂」が、家族の養育という義務と結びつくことで逆説的に家族の崩壊を招いてしまう様子を分析する。タイトルともなっている庭のフェンスは排他的な境界線である一方で、結末では断絶していた父子関係を修復し、「戦士の魂」の継承がなされることを示唆している。こうした多義的なフェンスの象徴性を丁寧に読み解くことで、本章では「戦士の魂」がコミュニティに対して持ち得る影響力の二面性が分かりやすく描出されている。

第3章では、サイクル第4作『ジョー・ターナーが来て行ってしまった』（1986）において、アフリカ由来の伝統音楽と舞踊が暗示する人種的苦闘の記憶と、そうした記憶を幻想的に描き出す「骨の人々」のイメージが、強制労働により同胞との連帯を絶たれ「社会的死」の状態に置かれた登場人物の中に人種的記憶を呼び覚まし、また彼に失われた歴史を回復する責任を自覚させるとの解釈を提示する。作品における「死」が暴力への批判ではなく歴史の発見のきっかけとなるという点が指摘され、サイクル劇におけるウィルソンの死生観の変化が鮮明に示されている。

第4章は、サイクル第6作『二本の列車が走ってる』（1990）が描く1960年代の対抗文化運動の功罪を、「死」のイメージと結びつけて分析している。歴史においては著名なアフリカ系アメリカ人の死ばかりが前景化されるが、本章では、むしろ彼らが象徴する人種内部での暴力や拝金主義こそが問題視されており、そうした問題が引き起こす反目や周縁化の最大の犠牲者である社会的弱者にこそ「戦士の魂」が継承さ

れるとの主張がなされる。死や暴力と結びついた血の表象が、多重に周縁化された人々を中心とするコミュニティの結束を表すものとして読み替えられている点が独創的である。

第5章では、ウィルソンの後期作品を複数（『二本の列車が走ってる』、『キング・ヘドリーⅡ世』[1999]、『大洋の宝石』[2003]、『ラジオ・ゴルフ』[2005]）取り上げ、それらの作品において繰り返し言及されるアート・エスターという人物の表象とその死の描写、さらに彼女の遺産の継承を分析することで、現代におけるアフリカ系アメリカ人の自らの人種的歴史への無関心という問題を浮き彫りにし、そうした無関心を克服する必要性が後期作品では強調されていると分析している。また中間航路で命を落とした人々の亡骸からなる「骨の町」が、ある種超自然的なものである精神的な継承における「死」と「救済」の重要性を具体的に表していると独自の解釈を提示するなど、ここまでの本編での議論をうまく総括する章となっている。

結論部では、奴隷解放記念日を祝日と定める法案にバイデン大統領が署名したことを例として挙げながら、過去の過ちを振り返り、無数の死者の貢献を認識することで、人種平等が実現される未来へと向かうというウィルソンの死生観が、現代アメリカで広く共有されるビジョンとなっていることが述べられ、本論全体の論旨が簡潔にまとめられている。

審査委員からは、「死」というものの持つ多面性を捉えきれておらず議論がやや平板になっている、先行研究や理論書を参考にせず「死」をどう概念化するかを明示しておくべきであった、「戦士の魂」の例を探し出すことに終始しておりテーマとしての掘り下げが足りず、また後半ではほとんど「戦士の魂」が言及されなくなるのは不自然である、といったコメントがなされたが、全体としては章立てや論の運びがよく工夫されており、文章表現も水準が高く議論を的確に伝えきれており、ウィルソン劇における「戦士の魂」と「死」の表象、およびそこから導かれる作家の死生観というテーマをきわめて分かりやすく提示した好論文であると言える。執筆者には、ウィルソン研究の核となる部分を丁寧に押さえつつ独自の論点を組み立て、それをまとめた研究成果としてまとめる力量が備わっていることが窺え、さらにアフリカ系アメリカ演劇および文学へと視野を広げることを目指している点でも、今後のさらなる発展が期待できる。

上記考査に基づき、論文の内容、文章表現、研究上の意義等を総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしい論文であるとの結論に達した。